

家禽市場には南北二つの入口がある。北口はもっぱら生きたままの売買用で、片足ずつそろえて括った雛鶏の束を、竹棒に通して担いだり、バイクのハンドルに掛けたりしている。

南口の奥に屠禽場がある。屠殺法には、イスラムの作法にのっとりた血抜きと、ミャンマー古来(?)の撲殺釜ゆでの二通りがある。



血抜き法にはムスリムの男が携わる。鳥の両翼を左手に束ねて持ち、ぶら下げた首の頸動脈にナイフを入れ、縮もうとする頭部を右手で引っ張りながら、垂れてくる血をプラスチックの円筒容器で受ける。最後は右手の親指で鳥の喉をしごいて血を絞り切る。溜めた血は自然に固まるので、血餅として非ムスリムに売るのである。

撲殺はニワトリなら左翼を左手で持ち、ぶら下がった胴体の肩甲骨のすぐ下を竹棒でたたき、ついで頭にも一撃をくらわす。ニワトリはしばらく翼や足を痙攣させているが、やがておとなしくなると、大釜に沸かした湯の中に放り込まれる。

図 1 アヒルの血抜きをするムスリムの屠禽者。右下のサインは本人のもの

アヒルは頑丈そうな体に似合わず、脊椎が柔^{やわ}やかなのか、棒など使わず拳骨で背中を殴るだけで、おとなしくなる。

中には元気な鳥がいて、順番を待たずにかご中央の丸穴から飛び出し、よろよろと舞い上がることもあるが、屠殺人は楽々とその足をつかみ、かごに戻す。野性をなくした家禽ごときの才覚では、ここを生きて出る道など、ありようがないのだ。

大釜の中身は竹の棒で何度かかき回され、やがて外に出されて、羽根をむしられる。道具立ては地獄絵さながらだが、従事しているのは鬼でもなければ、牛頭馬頭(ごずめず)でもない、どこにでもいる善良そうな若者たちで、粛々と機械的にことを運んでいる。

島崎藤村の『破戒』では、主人公・丑松の父親を角で殺した牡牛を屠殺する場面が、自然